

今回の教育実習を通して、授業づくりや生徒の関わり、教員としての在り方について多くの学びを得ることができた。

授業に関しては、「生徒にどのような力を身につけさせたいのか」「生徒のどこを伸ばしたいか」というゴールを意識し、逆算して授業を組み立てることの大切さを学んだ。実際に、これらを意識することで、授業で伝えたいことが明確になりまとまりができた。また体育では、ラジオ体操や前転、キャッチボールといった基礎的な運動が十分にできていない生徒が多くいた。こうした現状から、体育でさまざまな運動に触れることの価値を改めて実感した。さらに、「体育は正しい見本を見せること」が生徒からの信頼につながるといふ先生のお話を伺い、実際に自分が見本を示したことで生徒ができるようになる姿を見て、教師が直接指導する意義を強く感じた。

研究授業では「雰囲気づくり」の課題をご指摘いただいた。自分と生徒との関係は良好であったが、楽しい雰囲気だけで終わってしまい「なぜこの運動をするのか」という目的意識や、できる喜びにつながる緊張感を十分に生みだせなかった。やるときはやるといったメリハリをつけることも教師の大事な役割だと感じた。また、ipadを使用し、自分のフォーム確認を行ってもらったが、具体的な観点を示すことや、使用しない時の置き場所など、普段行わない作業をする分、細かな指示が必要だと学んだ。

生徒との交流からは、小さな積み重ねが関係づくりにつながることを学んだ。朝のホームルームで服装を1人1人チェックする時間があつた。その際に生徒の表情や雰囲気は普段と変化ないか声かけを行うことで、生徒の変化に気づきやすくなり、安心して話してもらえる関係を築くことができたと感じている。また毎朝一番に教室に行き、掃除を行った。掃除を通して教室を整えることが、生徒にとって勉強や活動に集中できる環境づくりにつながることを実感した。

職員室での学びとしては、学年主任、担任、副担任、教科担当、それぞれのカテゴリーで生徒一人ひとりの些細な出来事まで共有し合っている姿が印象的であつた。教師同士が情報を共有し合うことが、生徒理解の深まりや適切な対応につながっていることを知り、教員はチームで生徒を支えているのだと理解できた。

教育実習全体を振り返ると、「生徒を支援する姿勢をもちながらも学ぶ雰囲気をつくる責任を果たすこと」が求められることだと気づいた。雰囲気づくりができないままポイントを伝えてしまい、学習活動の目標を達成できなかった授業もあつたが、それは今後の課題である。

来年度以降の後輩に伝えたいことは、授業の準備を綿密に行うことはもちろんだが、「現場での気づきを柔軟に生かすこと」「生徒の様子をよく見ること」「授業の目的を明確にもつこと」を意識してほしいということだ。実際に行ってみないと分からないことは沢山ある。その中で、生徒一人一人の変化に気づき、その変化を支えるための明確な目標をもって授業を行うことが、教師としての基盤になることを学んだ。これらを意識して臨んでほしい。